

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

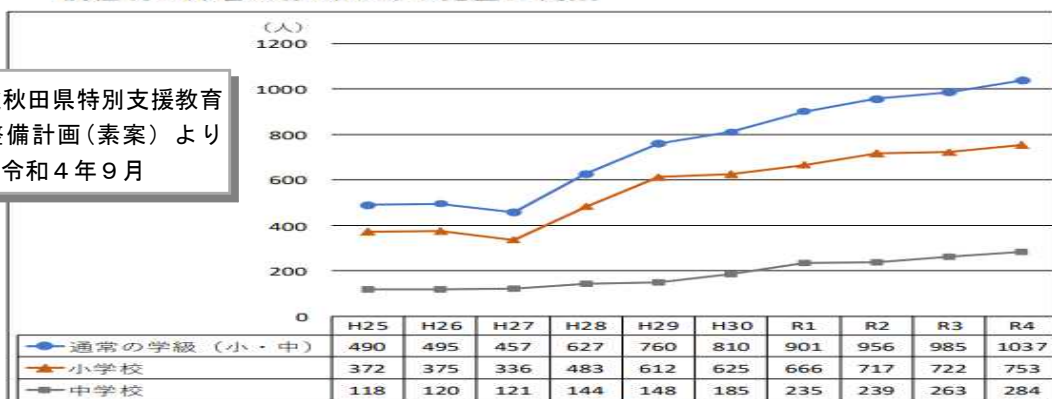


特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「薬の使用について考える」

4 通常の学級における障害の診断のある児童生徒数（小・中学校）
通常の学級全体の障害の診断のある児童生徒数と
校種別の障害の診断のある児童生徒数

第四次秋田県特別支援教育
総合整備計画（素案）より
令和4年9月



10年前と比べると診断名のある児童生徒が2倍以上に増えています。それに伴い、服薬している児童生徒も増えていると思われます。

ADHDの治療薬としては、コンサータ・ストラテラ・インチュニブ、ASDの治療薬としては、エブリファイ・リスパダール等が処方されます。子どもの服用している薬の効用をはじめ、種類や量、服用の回数や時間、副作用（眠気、気持ち悪い、食欲低下、頭痛）の出現等を保護者と共有する必要があります。また、薬の種類や量は、園や学校での集団生活の様子を参考に処方するので、できる範囲で細かく記録を付けることも大切です。

薬を飲めば全てが解決するわけではありません。発達障害の症状を全て解消するような魔法の薬はありません。薬物療法はあくまでも対症療法、補助的手段です。大事なことは、周囲の理解を含めた環境調整と、本人の自己理解を促すことです。保護者の中には、症状が和らいでほっとする反面、薬に頼っているという感情にさいなまれて罪悪感を抱くこともあります。家族の思い、毎日決まった時間に服用しなければならない子どもの精神的負担を考え、薬の使用を検討してほしいと思います。

浮き輪があると、子どもは溺れる心配をせずに、泳ぐコツを身に付けて一人で泳げるようになります。服薬すると、子どもは注意を持続させて、気持ちをコントロールできる時間が増えます。この状態のよいときに環境を整えながら、少しずつ自分の力で不注意や衝動性を抑えるコツを身に付けていくのです。なお、ほめるとドーパミンが分泌され、「がんばる気持ち」が育まれていきます。ほめることは、薬と同じ効果があるのです。



とれたて直送便



「保護者から親になる」

ある小学校のPTA研修会で、5月に作成した「保護者応援ガイド」を紹介しました。子どもを「できない存在」として保護し続けると自立を妨げるので、子どもの成長に合わせて対応を変える（保護者から親になる）、家族の一員としての役割を与え、報酬よりも感謝の気持ちを伝える、子どもが生まれたときの気持ちを忘れず、期待する喜びよりも幸せにする喜びを大きくするなど語り掛けました。

「保護者応援ガイド」を全ての保護者に配付したという園や学校があり、うれしく思います。これからもPTA研修会や5歳児健診等で、子育てに悩みを抱える保護者に紹介し、子どもと一緒に笑顔になってほしいと思います。**人は笑顔の数だけ幸せになれる！**